

My Days in NIUE Island

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬場, 優子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6196

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



南海遊録—ポリネシア ニウエ島¹ フィールドノート— (6)²

My Days in NIUE Island

馬場優子

1995年6月16日（金）

住み込み先に到来した美味しい食物や珍しい食物は主婦メレがほぼ一人占めする。その場に居合わせた他の人は少々分け前にあずかるが、その場にはない家族のために取っておくことは通常しない。そしてそれに不平を言う人もいない。主婦の食物分配権の強さには驚くばかりだ。

村祭りの時に2ドルで買った半切カボチャを甘辛煮にしていつもお世話になっているパルアの家を持って行った。それを知ったメレが「私にも作ってくれ」という。去年、同じものをメレ一家に作った時、さして喜ばなかったから、彼らにはあまりおいしくなかったのだろうと思っていたら、今回、「あれ、おいしかったからまた食べたい」とメレは何度も言う。そこで私は残りのカボチャを醤油と砂糖で煮た。メレはやはりほとんど一人で食べてしまった。一人占めするほど気に入ったのに「おいしかった」の一言もない。

そういえば、日常生活で他の人を褒めたり感謝を表す言葉はあまり聞か

¹ ニウエ島は南太平洋上の南緯19度、西経169度に位置する孤島である。隆起サンゴ礁島であるため、島の周囲は海拔およそ28mから69mの切り立った断崖に囲まれている。島の面積は約260平方キロで13行政村落から成り、最大人口を擁する村アロフィに行政府が置かれている。本稿は1994年から1995年にかけて行ったフィールドワークの日記の一部である。

² 「南海遊録—ポリネシア ニウエ島フィールドノート— (1)」は『コミュニケーション文化論集』第7号(2009.3.18発行)に、「同(2)」は同誌第8号(2010.3.20発行)に、「同(3)」は同誌第9号(2011.3.20発行)に、「同(4)」は同誌第10号(2012.3.19発行)、「同(5)」は同誌第13号(2015.3.20発行)に掲載。

い。議会での発言、教会での祈り、食前の祈り、その他公衆を前にしてのスピーチでは *fakaau* という感謝の気持ちを表すことを頻繁に発するが、日常生活でこの言葉を使うことはあまりない。親しい者どうしは言わなくても分かるということなのか、あるいは感謝の言葉を発することにより相手に恩義を負うのを認めることを避けるのか。

他人に命令もしくは依頼をする時の持つて回った言い方に慣れるのにも苦労する。非常に婉曲な言い方だが命令していることに変わりはない。先日、タナの母親の家にメレと一緒に訪れた時、タナの母が私に向かって「台所に行ってお湯が沸いているかどうか見て、沸いていたら自分でお茶をいれて飲みなさい」と言った。メキによると、これが意味するところは「台所へ行ってお湯を沸かして私達にお茶をいれてくれ」という依頼もしくは命令だったのだ。

朝、キリの家へ行くと、出勤前の女友達シラの髪を結っていた。キリは多くの人から散髪や髪結いを頼まれる。報酬はその時点ではなくても後で見返りがある。それは厚意程度のものであったり（例えば必要な時に頼めば車に乗せてもらえるなど）、夕食をご馳走になることであったり、パパイヤやバナナなどの食物をもらうことであったりする。

島に美容院は1店あるが、客が入っているのは見たことがない。*palagi*（外国人、主に白人を指す）たちは行くが島民は行かないと聞く。島の女たちはほとんど髪を伸ばしているし、短髪の方は知人や友人の器用な人にカットしてもらう。天然パーマがかかっているからパーマは必要ない。キリも村の散髪屋か美容師みたいなものだ。床屋の始まりとはこんなものだったのだろう。

この日の夜、ハクブ村からアバセリ村へ移動。日が暮れてからネリがハクブに迎えに来てくれたので、暗い中での引越しとなった。これがこの島での最後の引越しだ。出島までここに到着けると思うとほっとする。

夕暮れのハクブ村からアバセリ村へ向かう道路はココヤシ林のかなたに沈む夕日を受けたココヤシの木々がくっきりと影を落とし、熱帯では珍しくコントラストを感じる風景だ。

1995年6月17日(土)

今まで遠慮して言わなかったのだろうが、キリが率直に日本へのイメージを口にした。「日本製は安物だ」と言う。日本と並べて韓国、台湾、タイ、香港も挙げた。この島の人も戦後の欧米人の対日本人イメージをそのまま若い世代に至るまで受け継いでいるのだ。新聞も読まずテレビ・ニュースも見ないこの島の女たちには口コミが最大の情報源である。現代日本の状況を知らない彼女たちがニュージーランド人を通して得た数十年前の欧米人の日本イメージに固執しているとしても仕方がないが、イメージというのはそういうものだ。私たちだってどこかの国に対して同様の誤ったイメージを持ち続けているかもしれない。

どの村にも食糧雑貨や日用品を売る小さな店がある。マッチ、石鹼、洗剤、バター、小麦粉、ビスケット、牛乳、砂糖、塩、缶詰などが売られている。ハクブ村にはその種の店が4軒あるが、一見すると開店休業状態だ。懇意にしている少数の人のみ買いに行く。売る方も買う方も全く熱意が感じられない。店は定休日がない代わりに、その家の都合次第で開けたり閉めたりしている。店番をする子どもが大勢いればいつも店を開けていられるが、妻のみが店番をする家では彼女の都合が悪い時は店は閉まっている。どの店も自宅の一角の部屋に商品陳列用の棚を作り、窓を開けて、そこからお客と物やお金のやり取りをする。看板は全くないから、外から見ただけでは店かどうか分からない。しかし村人も他村の人々も知っている。ジャックの店など鍵をかけているからお客が来ると鍵を開けて中に入り商品を出す。売れる、売れないに全く頓着していないようだ。

こうした小商店の他にパン屋がある。パンを焼いて売っている。店構えはないが口コミで知られていて評判のよいパン屋には遠い村からも買いに来る。

1995年6月18日(日)

アバセリでは村の教会の広場に隣接した場所にあるホテルに宿泊することにした。夜は静かだ。静かすぎる。目の前の庭にはお墓があり気味が悪い。ココヤシやバナナの葉が落ちる音にビクッとする。

朝の礼拝の時、大合唱が聞こえてきたので数十人も集まっているのかと思ったが、20人足らずだった。とにかく皆大きな声で歌う。

1995年6月19日（月）

郵便局のそばを通りかかったので立ち寄った。開いているけど誰もいない。声をかけても返事がない。しかし2、3分後に局員が私宛の小包を抱えて奥から出てきた。どこで見ているのか、誰が今どこで何をしているのかお互いによく知っている社会だ。

1995年6月20日（火）

虫さされがひどい。痒くて夜も眠れないことがある。いつも必ず虫よけスプレーをしており蚊に刺された覚えはないが、腕、脚、背が虫に刺されている。ノミ、シラミ、その他多種類の小さな虫が沢山いるから防ぎ様がない。痒み止めも効かない。身体中を頻繁に搔いている有様だ。

1995年7月4日（火）

この島はサンゴ礁が隆起してできた島なので大小の洞窟が島中そこかしこにある。かつてこうした洞穴は島の人々の住居であり墓所であった。

洞窟内部の構造は立ち歩いて一回りできる単純なものから、這ってひたすら水平移動するもの、底が見えない垂直の岩壁にしがみついて進むもの等、多様だ。洞窟探検家にとってはさしずめ夢のような島であろう。

私もこの島で今までにいくつか一人で歩いたが、今日はやや難度の高いウルパカ洞窟のツアーがあるので参加した。真暗な中を各自、頭に大きな懐中電灯を付け、鍾乳石や石筍の間を中腰や四つん這いで上ったり下ったりを1時間半。keyholeといわれる小さな穴をくぐり抜けたらすぐ下を川（地下水脈）が流れているので、滑り落ちないように4本の手足を有機的に連動させながら足場に辿りつく。これには地元の男性ガイドが「ここに右足を、あそこに左足を、そこで身体の左を下にして同時に左足を穴の中に入れて……」等と指示する。それに従って歩けば怪我をせずに出口に辿り着くわけだ。出口に着いた時には9人の参加者全員が顔も手足も服も汚れて真黒になっていたので、皆で海に下りてリーフの脇で手足を洗った。

参加者の一人であるニュージーランドから観光でやって来た女性リンダは明らかに70歳代で背が低くよく肥えている。彼女を先頭にして（つまりガイドのすぐ後ろ）隊は歩いた。keyholeは通れないのではないかと心配になるぐらい太目だが、人間の身体は骨以外は押せば引込む柔軟性がある。かな

り難儀した箇所もあったが、参加者全員で彼女の身体を押ししたり引いたりして keyhole も何とか通過した。

こういう strong-minded が時々いるものだ。ガイドによると、先日、ニュージーランド人の 80 歳代の男性がこの洞窟ツアーに参加して、通常は 1 時間半で終るところを彼は 4 時間かけて踏破したという。老齢だからといって諦めることをせず、たとえ若い人より時間がかかろうとも自分の持っている能力を最大限に発揮するように努める。高齢社会のお手本を見出した思いがした。

1995 年 7 月 13 日 (木)

そろそろ帰国が迫ってきたので法務局での資料収集に拍車をかける。思い返せば法務局ではこの 1 年間、相当重要かつ貴重な資料まで閲覧し、コピーをさせてもらった。日本でも 30 年ぐらい前までは戸籍等も調査目的であれば自由に閲覧できたが、現在は人権の問題や個人情報の開示に関わる法や意識が浸透し、学術調査のためであっても閲覧はできない。ニウエ島も遠からず個人のプライバシーに関わる資料の閲覧は不可能になるだろう。今回、閲覧は可能だったが 7 月になってからコピー代を異常に高く請求された。以前は 1 枚 20 セントだったのに今回は A4 紙が 1 枚 1 ドル、A3 紙が 1 ドル 50 セントという。ハンバーガーが 1 個 3 ドルだからそれと比較してもかなり高額だ。値上げの理由を訊いたら情報提供代だといわれた。当然といえば当然だ。

1995 年 7 月 14 日 (金)

早起きして毎週金曜日に早朝 5 時から始まる市場へ行く。真暗な中をもう人々は集まり、ココヤシ、タロイモ、バナナ等売っている。私にはここでココヤシと *pia* (クズウコン) で作る薄甘いおかゆを朝食とするのが楽しみだ。おかゆはココヤシを半切にしたお椀のような器でいただく。他の人が使ったものを洗わずにそのまま使う。

市場に集まってくるのは買う人より売る人の方が多い。圧倒的多数が女で、彼らも商売をするためというよりも、知合いに会っておしゃべりをするのが目的のようだ。一般にここで稼いだお金は貯めるより使ってしまうと言われるが、中には毎週のようにおかゆと飲み物の店を出し、毎回 100 ドルぐ

らい稼ぐというアタのような逞しい女もいる。彼女はこの稼ぎで新しいトラックを買い、家も建て直したという。

1995年7月18日（火）

この島のような一年中気候の変化のほとんどない所に住んでいると、刻々と変化し進んでゆく時間のうつろいを認識することが難しい。ここで毎日、半袖Tシャツで暑い暑いと言って空と海を眺めている間に、日本では夏が終わって秋が来て、冬の厳しい寒さを越えて春を迎える。時間が過ぎゆくのを実感できる。外的な変化がないと時間は無限に続くような感覚に襲われる。悠久の時間の中で生まれて死んでゆく人間の人生は有限だが、この有限感をここの人々は認識しにくい環境の中で生きているようだ。だから焦ったり苛立ったりすることなく、のんびりと穏やかに、一時的に何か望ましくないうことが起こってもその内何とかなるだろうと思い、笑って済ませることができる。人々の生活を見ていると、自分の人生を、一年、一か月、一週間、あるいは一日を時間的に分断して、その中で予定を立てたり向上の努力をするのとは無縁の生活をしているように見える。来る日も来る日も同じように過ぎ、外の世界は刻々と変化しているのにその変化を認識せずに、また自分自身の変化にも気付かずに時間が経過してしまうのではないかと。

1995年7月25日（火）

雨が降り始めるとにおいで分かる。音はどうだろうか。常に波の音やカタカタ（カサカサ）というココヤシの葉のこすれ合う音が聞こえてくるので音で雨の降り始めを判別するのは難しい。しかし今日は雨が地面を叩きつける太鼓のような音で目を覚ました。

1995年7月26日（水）

首都アロフィ村の法務局や法廷がある広場の一角に小さな博物館がある。島の人々が昔、使っていた生活用具を少数、並べてあるだけだが、島では唯一のミュージアムだ。職員として館長が一人配置されている。現館長ドリスの机の上にはいつも書類が雑然と積み上げられている。見学者もあまりいないので彼女はいつも退屈そうだ。不在のことも多い。先日、ドリスが、私が探し求めていたアロフィ村の一面の数十年前の土地保有状況の資料を探して

おいてくれる約束をしたのでその結果を訊きに行った。「探したが無い」と言う。法務局が保管しておくべき島の大変貴重な資料なのにどの部局もなくしてしまったようだ。だが、彼らの「探したが、無かった」もそのまま信じることはできない。彼らはその場を切り抜けるためにその場限りの口約束(〇〇してあげる、××をあげる、等)をかなり気軽に頻繁にするから、本当に探したのかどうかは分からないのだ。

ドリスのところで話し込んでいた *palagi* が「コンニチハ、ユーコサン」と親し気に話しかけてきた。ニュージーランド人の大工でヘレの夫パルマンである。3か月前までこの夫婦は大阪で宣教活動をしていた。日本人は一万円札を何枚も持ち歩き、気軽に使っていると驚いている。日本食はうどん以外は苦手でかなりマックを利用していたという。それを聞いたドリスが「へえーっ、日本にもマクドナルドがあるの?」とびっくりして言った。「各駅にあるわよ」というとなおさら驚いた。ニウエ人のインテリの部類に入る人でも近隣の島嶼国とニュージーランド以外の外国のことはあまり知らないのが現状である。日本のことは正確に知られてはいない。台湾、香港、中国、韓国そして日本が全く混同されている。

ドリスは前政府書記官テリの娘である。ポリネシア人にしては陰気な雰囲気気を漂わせており、たいていイライラしている喫煙家である。ニウエ・ホテルのバーテンダーであるハイアと昨年結婚式を挙げた。この時、二人の間の娘ジェニーは8カ月になっていた。この様な同居→出産→結婚というプロセスは現在、ここでは極めて一般的である。ハイアには前のガールフレンドとの間に5、6歳の息子がおり、ニュージーランドに母子で住んでいるが、息子は時々島にやってきてドリスの家庭に逗留する。先週の日曜日、ホテルのバーベキューの時、私はドリス母子とその男児のテーブルに加えてもらった。ドリスはその男の子に食べ物を取り分けたり、食べ方が悪いと叱ったり、まるで自分の子の様に接していた。その時、ドリスは、その男児は父親(ハイア)に似ていないが娘ジェニーはハイアにそっくりだろうと誇らしげに言った。まるでハイアにそっくりな子どもを産んだ自分の勝ち、と言わんばかりに。

ホテルのバーは夜12時に終るので週の半分はドリスがハイアを迎えにホテルに来てロビーでテレビを見ながら待っている。こういう時はドリスの母親が娘ジェニーの面倒を見ている。

1995年7月28日（金）

帰国が近づくにつれ、心理的にやや変化が起こっているのに気付く。ニウエ滞在の前半は日本が遥かかなたの、手の届かない所にあるようで、日本のことも日本食も思い出したくない、というか思い出してもどうしようもないので諦めに似た気持ちを抱いていたが、もう間もなく故国の地を踏めると思うと、自分に対して今まで禁じていたことを解禁したかのように日本を自由に存分に懐かしく思い描けるようになった。田楽、冷奴、木の芽あえ、筍ご飯等々、手帳に帰国したら食べたい日本食をリストアップしている私である。

1995年8月1日（火）

アロフィでニウエの伝統木工具を一人黙々と製作し、作品を展示・販売している男トアはハクプ村での近隣住民トアの息子で、父子が全く同名の親子である。彼はアロフィの女と結婚し、妻方居住を選んだのでアロフィに住んでいる。

彼はキリスト教伝来以前の、ニウエ人が戦いに明け暮れていた時代の槍、短剣、斧、木枕等を作っている。槍を持ってみた。ずっしりと重い。片手では持ち上げるのに苦労し、持ち続けることはさらに無理だ。短剣も斧も非常に重い。こういう重い武器を携えてこの島の男たちはブッシュや森や林、サンゴ礁の岩壁、断崖、洞窟の中などを走り、這い、上り下りし駆け廻った。当然、彼らは屈強な体力、腕力を備えた勇壮な戦士であることが期待された。平時も早朝から夕方までブッシュで農耕に励んだ。体力が付き、頑強な体躯が自然に備わったことだろう。40代のトアが子どもの頃ですら朝6時ごろから夕方6時ごろまで食事もせずにブッシュで働き、夕方、帰宅後に食事をした、という。最近の子供達は“Eat and go to school, come back and eat.”だから強壮な身体ができない、と彼は慨嘆している。

コマーシャル・センターの空き店舗で Mark Cross の作品展が開かれている。彼はリク村に住み、リクの女と結婚した *palagi* の画家である。長い間、ニウエ・ホテルに飾られていた、癌で他界した彼の娘を描いた有名な絵もホテルから移されて展示されている。

開室時間は店頭に掲示してある。昼休みは閉室となるので気をつけて開室

時間内に行った。確かに明示してある時間内だった。にもかかわらず誰もいなくて鍵がかかっている。銀行とドイツ人経営の精肉店以外はこういう状態だ。郵便局ですら開業時間内でも鍵がかかり無人の場合が多い。気紛れに店を開けたり閉めたりしていると見える。人々は文句も言わずに待っている。

1995年8月2日(水)

島の医療統計資料を保険局局長のイキに依頼してある。出来上がったら電話をくれる事になっているが、案の定、ない。待っていては何事も進行しないのがこの島のあり方で、こちらから催促に行くのが当然だ。彼は病院の受付にいた。彼は私を見て準備してあった資料を取り出して写したり計算したり始めた。目当ての資料を探してあっただけ良い。何もしていないのとは違う。

かなり待たされた後、私の依頼した質問項目を書いた用紙に書き込む。癌死亡率の数字のことで質問したら気になったらしく、もう一度調べ直したいから別の時に来てほしいと言う。1週間延ばした。局長といっても秘書がいるわけではなく、コピーからして彼が自分でしなければならない。

彼はフィジー人の血が入っている。真っ黒な細かいちぢれ毛。がっしりした体格で上背もある。彼はラグビーの試合で大活躍する。あの大きな身体で全速力で走り、ぶつかるから、その迫力は凄まじい。

平日は病院で仕事をし、シーズン中の週末はラグビーで大活躍する。通常の土曜日はブッシュで農作業をし、日曜は聖書と賛美歌集を小脇に抱えてハクプ村の白い道を教会に向かってゆっくりと歩いて行くイキ。彼はこれらをすべて統合した生活を送っている。彼に限らずこの島の男たちはいくつもの活動をバランスよくこなしている。しかしそれも中年までだ。50歳を過ぎて退職した頃から生活が崩れてゆくことが多い。飲酒の問題が出てくるのもこの頃からだ。

病院で駐車場へ戻った時、誰かが大声で呼ぶ。見回すと薬局のそばで野球帽をかぶった小太りの男が手を振っている。収賄疑惑で失脚した前首相ノガだ。事件以来、彼に会うのは初めてだ。「風邪をひいてしまってね」と相変わらず元気そうに快活に話す。この人と話していると、「世の中に心配な事は何もない、夢を抱いて自分の望む方向に進んで行けばそれでよい」という

単純な幸福感が伝わってくる。贈収賄事件のことでは「私は潔白だ」と言い切った。場合によっては現在の主任判事を更迭してもらうかもしれないと言う。自分は絶対に悪いことはやっていないと断言する。しかし彼が悪い事をしていないつもりでも彼を仲介して悪事が行われることがあるのだ。これは全て10月の法廷待ちである。

ノガは病院に来ていながら、長く入院している父親の病室を見舞わずに帰っていった。父親から次の *leveki magafaoa* (親族集団 *magafaoa* の代表者) の指名をすでに受けているからか。父親の大勢の子どもたち、孫たちは交代で病室に寝泊まりしているのに彼はほとんど行かない。彼の妻にいたってはなおさらだ。父親の後妻は病室の空きベッドで寝、子ども、オイ、メイ、孫たちなど数名が病室の外のベランダのような廊下で一日中暮らし、寝泊まりしている。

オークランド在住の妹ネリッサも帰島し、一ヶ月間滞在して先週帰っていった。「足をさすってあげたら少し良くなって足を動かせるようになったので、私は大変嬉しい」と彼女は言った。父親の最期はそう先のことではないと医者に言われているようだ。今ニュージーランドに帰るということは臨終の時には島にいないことになる。恐らく臨終の時よりも親の最後の日々にそばに来て看病の方が重要なのであろう。それは土地権継承に関する遺言と関係があると見てよい。逝く人は、そろそろ寿命だと察するとどの土地の権利を誰に譲るか言い残してゆく。そうでない場合は、生前から事あるごとに語っていた内容が遺言となる。故人の残した言葉に従わないと不吉なことが起こると信じられており、遺言はきわめて重要なのである。

1995年8月3日(木)

ハクブ村とその北のリク村の間にあるヴァイコナの洞窟へ行った。ここは島の数ある洞穴の中でも最も危険でスリルのある所で、地元のガイドは以前から案内を頼んでも渋っていたのだが、今日は他に行きたがっているカップルがあり、私を含めて同行者が3人になったので行く気になったようだ。カップルは30代のニュージーランド人男女。

道路の脇のココヤシ畑を抜けるとすぐ熱帯雨林に入る。何千年も何万年も前から生い茂っているような巨大な葉や蔓が八方に伸び、日本では観葉植物として知られているシダ類が樹々の間を埋めている。足元には大小のサンゴ

岩が積み重なってゴロゴロし、その間を太い樹根が四方から伸びてきて網目の様になっている。足元は濡れた落ち葉が重なって滑りやすいので、足場を探しながら一步步進んだ。

やがて樹海を抜け、大きなサンゴ岩が連なる所をどこまでも下りて行った。この道なき道に一人で来ていたら確実に道に迷っただろう。波の音が聞こえる所に来た時、ガイドが急に真剣な顔になったと思ったら、一見すると洞窟には見えない、ただの大きな岩の小さな裂け目のようなものが目の前にあった。ガイドは「ここで余計な荷物は置いて行け」と言うが、私はこの洞窟の中の池で泳ぐつもりで持ってきた水着とカメラをナップサックに入れてきただけなのでそのまま背負って行く。

小さな裂け目の様な入口を腹這いになって入るといきなり下に向かって急斜面になっていて、4人はその断崖絶壁にしがみつきながら横一列になって、一步一步、足場と手でつかまる所を探しながら進んで行く。絶壁の下方は暗くて見えない。聞くところによるとほとんど底無しといってもいいくらい深い谷になっているという。「滑ったらもう上ってくるのは無理だよ」とガイドから注意されたが、私は注意しながらゆっくり進めば滑らずに中間地点の岩棚まで到達できるだろうと高を括っていた。しかしこの1年間、散々お世話になった運動靴はもうかなり靴底が滑りやすくなっていたらしく、ついに足を滑らせ、断崖に両手でぶら下がる格好になってしまった。幸いに片方の足場をすぐに探し、両手は前後の人がしっかりつかんでくれたので落下は免れたが、生きた心地はしなかった。その後は進むも戻るも同じなので座れるほどの岩棚がある所までとにかく進み続けた。その岩場まで来ると地下水が溜まった美しいエメラルドグリーンの深い池が遙か下方に見えた。ニュージーランド人カップルはその池でダイビングを、私は泳ぐ予定であったが、その池まで辿り着くには切り立った断崖絶壁をさらに下りて行かねばならない。ニュージーランド人は「僕たちが先に下りて大丈夫だったら下りていらっしやい」と言い、ガイドは「そこで待っていてもいいんだよ」と言ってくれたが、私は、足が滑ってからすっかり気が動転しているものの、あの美しい水溜まりで泳いでみたいという気持ちもあり「少し考えてみる」と言って岩棚に止まった。結局は無理をしないことにした。命拾いをしただけでもこの上ない幸運だったのだ。

気が進まないが、来た道は戻らねばならない。落ちても受け止めてもらえ

るよう、ガイドの上方を横歩きした。帰路は問題なく戻れた。しかし、あの時のヒヤっとした思いはいつまでも残っている。

帰途、サンゴ岩と樹の根の入り組んだ道なき道を歩いている時、枯葉で足が滑って左足首を捻挫した。帰国まであと2週間というところで少し気が緩んだのかもしれない。

1995年8月5日（土）

ラグビーのシーズンだ。毎週土曜日にはハイスクールの校庭で試合が行われている。村落対抗試合だが、ハクブ村のようにまとまりがあって村人のアイデンティティが強い村は2チーム出している。激しくぶつかり合う男性的なスポーツであるラグビーは男たちにとって往昔の戦争の代替物という印象を強く与える。女たちが周囲でにぎやかに応援し、時々黄色い歓声が湧きあがる。恋人や夫が見事なプレイをすると一段とその声は大きくなる。弱かったりミスしたり、良いプレイをしないとブーイングの嵐だ。男たちは試合で男を上げる。往時、戦争の時に男としての評価の得点を稼ぎ、勇猛果敢な戦士として名声を上げたのと同じように。

スポーツ以外にも男が評価される立場、女が評価する立場、言いかえれば男が役者で女が観客という状況が散見される。役者の演技が拙かったり、面白くなかったりすると観客は野次を飛ばして不満を表し、逆に良い演技をしたり面白可笑しい仕草で皆を笑わせると観客は大喜びしてヒューヒューと大喝采だ。ダンス・パーティでもそうだし、結婚式や断髪式などの通過儀礼、あるいはごく普通の宴会でも歌と踊りが入ると、その場を湧かせる、受ける演技をする男は皆を喜ばせ、女たちはヒューヒューと歓声をあげる。

1995年8月7日（月）

島の2人の長老の一人、マケフ村のパニ（76歳）へのインタビューが残っており、今日になった。彼の6代前の祖先が島へのキリスト教伝来に大きな功績を残したベニアミナだ。話を伺うことになっていたマケフ村の牧師館に彼は汚れた水色のTシャツの上に柄物の半袖シャツをはおり、黒いズボンに裸足で、汚れた白い犬を連れて現われた。島のこの世代の人の英語はややたどたどしく、すぐにニウエ語になってしまう。私は知っている単語から推

測するが追いついていけないので今日は村のロマに通訳を頼んだ。

日焼けした穏やかな笑顔。相好を崩すと大変人懐こい表情になる。ハクブなど島の南部の村で時々見かける怖い系統の顔とは全く違う。この人は極めて話好きで、英語になったりニウエ語になったりしながら一人でしゃべっている。頻繁に煙草を吸い続ける。普通の市販の紙巻き煙草だ。珍しく物静かな声で、近づかないと聞き取れない。

インタビューの途中、(後で分かったことだが) 7、8歳の男児が建物の外で金属製のをコンクリートにこすり合わせたような物音をたてた。すると耳を澄まさねば聞き取れないくらいの声でしゃべっていたパニがや、声を大きくして「音をたてるのは止める」と言った。音はすぐ止んだが、しばらくして先程の音がまたかすかに聞こえた。パニがまたわずかに声を大きくして注意した。この声では建物の外にいる人には聞こえまいと思われるくらい声だったが、男児には聞こえたらしい。彼は牧師館の付近から立ち去っていった。

この島の人々の耳の良さにはいつも驚かされる。家の中で座ったまま外にいる人や道を歩いている人とごく普通の声でしゃべる。声を張り上げずに会話するのだ。

1995年8月15日(火)

出島の日が迫ってきた。日本に帰ったらきっとこの島を懐かしく思うだろうと名残惜しい気持ちが膨らんでくる。雄大な空と雲、群青色の海、夕方風に揺れてココヤシがカタカタと葉をこすり合わせる爽やかな音、茜色に染まる日没、夜、漆黒の天空に浮かぶ南十字星を中心とする満天の星、等々きくと懐かしく思い出されるだろう。

1995年8月17日(木)

日本人の女子学生が1年間休学してニュージーランドに来ている間に、たまたまニウエの存在を旅行社で知ってやって来たという。彼女は十分な資金も持たずにキャンプをしながら島を一周するつもりでやって来たということ、その話題が島中で持ちきりだ。南太平洋大学の会計監査のためにスヴァからやって来たツバル人のみは彼女と来島時に飛行機で一緒だったとかで大変同情的だが、ニウエ人は一様に困惑している。

若い女性がたった一人でキャンプしながら島内巡りをするのは、いくら平和な南太平洋の島とはいえ、無謀すぎる。この島でも危険な事件が起こらないとは限らない。もし観光客を巻き込む事件が起きれば、観光によって経済発展を目指しているこの島の将来にも関わってくる。だから彼らはこの若い日本人女性を放っておくわけにはいかないのだ。彼女自身は自分の無謀さに気づいていないようだが、島の人々にとって彼女は来島するや否や迷惑な存在になってしまった。

結果的には、大阪での宣教活動から戻って間もないヘレ夫妻が大変心配して、アバセリ村の自分の家の前にある空き家を世話して一件落着した。この空き家はヘレのニュージーランドにいる兄弟の家だが、これを女子学生に貸してもよいかどうかを一族の *leveki* であるパナに尋ねた。彼は少し考えてから“OK”と言ったそうだ。ヘレは“The Lord helped us.”と言った。

1995年8月18日（金）

いよいよ出島の日が来た。余りにも長い間、島にいたので、すでに島の人々にとっても私がここにいることは特別なことではなくごく当たり前のことのように思われている。この日を境に私が島にいなくなることを知り、人々は月日の流れを感じたようだ。

出島を前にして昨日、地元紙のインタビューを受けた。実は1年前から求められていたのだが、個々人のプライバシーにかなり踏み込む私の調査内容からしてあまり派手に新聞に載りたくないの、「帰国直前に」とお願いしておいたものだ。昨日インタビューを受け、写真撮影が行われた。そして出発当日の本日午前中に発行となった。実に良いタイミングだ。

記事は扱い方が大きくA4版より若干大きめの紙面のほぼ1頁をさいいで、しかも大変好意的であった。私は島唯一のこの新聞（基本的に週一回発行）を2年間購読しているが、一人の人間をこれほど大きく扱ったのを見たことがない。私の調査内容やそれに関連することを解説したうえで、ハクブ村に住み込んだ私を地元のコミュニティーの一員として受け入れてくれ、また長いインタビューやその他の話相手になってくれた忍耐強い島の人々に私が大変、感謝していると締めくくってある。

1年前にこういう記事が載って皆に知られてしまったら調査はやりにくくなったであろう。それを避け、アノニマスの存在で人々の間にいつの間にか

入り込んでヴァイレレ家の親族の一人として行動できたことは幸運だった。首相や国会議員をはじめとする島の名士から子どもや老人まであらゆる層の人々と友達になり、その生き方に触れ、相手が私を自分と同じレベルに置いて私のプライバシーに関心を寄せてきても逃げることはせずにこちらもごく自然体で相手の知りたがっている私の素顔を見せていた。それでいつの間にか警戒心を解いて私を受け入れてくれたのであろう。

いよいよ離陸の時が来た。小さな飛行機にはどうしても不安感がつきまとう。機体は長い滑走路の端まで来ると、まるで模型飛行機のようにふわっと舞い上がる。思わず座席の縁を握りしめた。

眼下にはアロフィ・タマコトンガ間道路が白く光っている。飛行場のそばのヒネの家が見えた。アロフィ・ハクブ間道路が細くくねくねと走っている。ジャックの古い家がぼつんと見えた。その前のブッシュにヘトアが建設中の天水タンクと小屋が見えた。飛行機はハクブの上空で旋回したのでまた飛行場が見えてきた。アロフィの家々が整然と美しく海岸に沿って並んでいる。ニウエ・ホテルが見えた。機体はぐいぐいと高度を上げ、ホテルが小さくなってゆく。食堂棟の八角形の屋根が、水色のプールが、どんどん小さくなってゆく。代わって海岸線が白い波に洗われているのが目に入った。その直後、機体はまた向きを変えたので視界には群青色の海のみが残った。

(完了)